第3種郵便物認可
朝日新聞 2020年(令和2年)4月12日(日) 13版S 総合企画 4

4/12 朝日

ニュースワイド NEWS WIDE

介護とわたしたち 変わる家族②

綱渡りの息子介護 脅かすコロナ

介護保険スタートから20年。顕著なのは、「男性介護」とりわけ「息子介護」の増加だ。きょうだい減少、未婚率の上昇により、シングルの息子による介護は、もはや珍しくない。新型コロナウイルスの感染拡大は、綱渡りの息子介護を脅かし、緊張は高まっている。

（編集委員・清川卓史）

88歳車いすの母 3年前から世話

送りは朝7時20分、迎えは夕方5時半。岡崎伸郎さん(55)が出退勤途中、要介護5の母幸子さん(88)を介護事業所「平成の家」（群馬県伊勢崎市）に車で送迎するようになって、間もなく3年になる。

最近は朝の検温が欠かせない。送迎時に施設内には一歩も立ち入れない。新型コロナウイルス感染防止のためだ。

自宅に母と2人で暮らす。母は3年前に足を悪くして入院、その後、認知症の診断も受けた。車いすの母の介護と家事全般が、岡崎さんの肩にのしかかった。

早いと午前3時前に起床。洗濯機をまわしつつ家事を片づける。5時過ぎには母に朝食を食べてもらい、自分はシャワー。家を出るのは7時前。車いすの母を抱きかかえるようにして後部座席に乗せる。退勤後はその足で母を迎えにゆく。

つらいのは夜の時間だ。頻尿のため、母は1晩5～10回、尿意を訴える。ベッドわきのポータブルトイレに誘導する。夜中に「背中がかゆい」などと訴えたり、急に昔の話をはじめたり。ほとんどまとまった睡眠がとれない。「いい加減にしてくれ」と怒鳴ってしまうことも。「実際のところ、日々睡魔との闘いです」

老人ホームに入居してもらえば楽になる。そう考えることもある。しかし「2人で食べるとおいしいよ」と笑顔を見せる母の気持ちを思えば、ギリギリまでがんばろうという気持ちになる。

小学校低学年のとき、岡崎さんは食品アレルギーで給食が食べられなかった。幸子さんは給食そっくりのメニューを安心な食材で作って、毎日学校に届けてくれた。

「たくさん愛情を受けた分、いま返しているんです」

勤続30年になる地元メーカーは、残業がほとんどないのが助かっている。

感染しないよう 祈りながら

母が利用しているのは、小規模多機能型居宅介護という介護保険サービスだ。通所介護を中心に、泊まり、訪問介護などを組み合わせ、在宅生活を支える。平成の家では、朝早くから母を預けられ、自身の急病のときは緊急に泊まり介護を依頼することもできる。

週末の2日間、母は施設に泊まる。昨年秋までは週1日だけだった。しかし「体がしんどくなってきて」、2日に増やしてもらった。

母が泊まりの夜も、習慣で夜は2、3度目覚めてしまう。山歩きが趣味だったが、最近は介護疲れで難しくなった。自身も糖尿病の治療を続けていて、体調管理のため酒は月1回2杯までと決めている。数少ない息抜きは「1人カラオケ」。好きな歌を1人で絶唱する。

いま一番の気がかりは、やはり新型コロナだ。感染リスクを下げるため、帰宅途中に母とスーパーに立ち寄るのをやめた。早朝の24時間スーパーで買い物をする。

もし「平成の家」が休業になれば、仕事を休んで自分が母をみるほかない。また、万が一自分が感染すれば、母は濃厚接触者なので「平成の家」は利用できなくなる。そうなったら母と一緒に家で療養するしかない。「感染しないよう祈りながら暮らしています」

感じる深い孤立 冷たい世間の目

「なにかあったら、これを押して」

ベッドで寝たままの母(88)の顔の前にナースコールを掲げて見せながら、黒川誠二さん(60)が声をかける。母・富士江さんは要介護5。アルツハイマー型認知症の診断を受けている。

24時間365日、点滴で栄養を補給している。そのため施設入居やデイサービス（通所介護）の利用が難しい。「母は自分がみる」。そう決意した黒川さんは建築関係の仕事を2018年に辞め、千葉市の実家で母を「フルタイム介護」している。

小学生の頃、体じゅうをハチに刺され庭で大泣きした。必死に毒を吸い出そうとしてくれた母の面影がいつも心の底にある。

訪問介護・看護や入浴サービスなど介護保険はめいっぱい使う。介護食の準備や食事介助、オムツの交換、点滴の薬液交換など、ケアは途切れることはない。夜はナースコールの受信機を枕元に置いて眠る。最初は抵抗があった陰部の洗浄も、いまは慣れた。「1日3回も4回もやりますから、悩んでいたら介護できないですよ」

夜に発熱することがある母。新型コロナウイルス感染の拡大で、体調管理に神経を使う。37度5分以上の熱があれば、訪問入浴などの利用は難しくなるからだ。

住み慣れた自宅で穏やかな顔つきでいる母をみれば、「息子介護」という選択に後悔はまったくない。「ただ、嫁さんも子どももいないですし、将来を考えると落ち込みます。介護が終わった後の仕事をどうしようかとか……」

なにより深い孤立を感じるのは、息子介護への世間の冷たい視線だ。

あるとき、買い物帰りに行き会った顔見知りの近所の年配の男性から、「男やもめ」という言葉を投げつけられた。ショックで言い返す言葉も思い浮かばなかった。

「いい年をした男が仕事もしないで親の介護に専念していることが許せなかったのだろうと思います」

いわゆる「生産性」の有無で人を評価する風潮が強まり、介護の営みを無駄と受け止める人がいる。その現実を肌で感じる。

「男やもめ」の体験を朝日新聞の「声」に投稿、昨年7月の東京本社版などに載った。うれしかったが、ひっかかったのは、紙面では肩書が職業分類されて「無職」となっていたことだ。「自分は『在宅介護専従』で『無職』ではないと思っています」

男性介護の実態に詳しいケアタウン総合研究所の高室成幸さんは「介護の社会化を掲げた介護保険は多くの女性を『嫁介護』の呪縛から解き放った。一方で家族のあり方が激変し、中高年シングルの息子介護という光のあたりにくい問題が新たに生じた。そこから介護離職、高齢者虐待、介護貧困などの厳しい状況が生じている」と警鐘を鳴らす。

「『いい年した男が介護なんて』という世間の目は根強くある」と指摘する高室さんは、専従の家族介護者を登録して毎月数万円の家族介護手当を払うことも介護保険見直しで検討に値すると提言する。「家計支援だけでなく、介護の社会的評価向上にもつながる。希望者は短時間でも介護施設や事業所で働くことができると就労支援にもなり、介護人材不足解消の一助にもなるのでは」と話す。

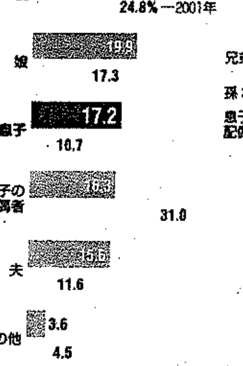
▲「熱いかな。お味はどうですか」。88歳の母に声をかけながら、夕食の介助をする黒川誠二さん。メニューは、手作りの具なし茶わん蒸しといもきんとん（市販の介護食）。お茶にはとろみがつけてある＝2020年2月、千葉市

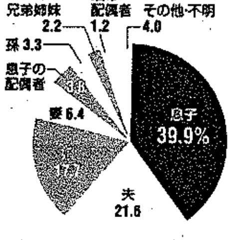
取材中に「肩が痛い」と母(88)がつぶやくと、岡崎伸郎さんはすっと立ち上がって肩をもみ始めた＝2019年12月、群馬県伊勢崎市 ▶

息子介護の増加

同居する主な介護者

厚生労働省「国民生活基礎調査」から



息子による高齢者虐待が最多

高齢者からみた虐待者の続柄。高齢者虐待に関する厚生労働省調査（2018年度）から